

優秀賞

別れは言わないよ

小豆島町立星城小学校六年 岡田 晴貴

(はあああ。三年前は、あんなに広くて日当たりも良くて自由がいっぱいだったのに。今じゃ日に当たることもない！せまいっ！おまけにすのこでふたされて、外も見えない。晴貴が来るのは、朝の会の前と昼休み。飼育委員会のみんなは、うさぎのポツキーにばかり行って、ぼくはわすれられてる。)

「カメ吉！元氣してる？水がよごれるから水かえしとこっか。冷たいけどいい？」

(あつ晴貴だ！よしっ来てくれた。やった！)

いつものようにカメ吉の声が聞こえた。ぼくは動物好きで、一年生の頃から学校の真ん中にある亀池をよく見に行

った。そこにいたのがカメ吉。種類はミドリガメ。入学した時は二匹いたけれど、三年生の時の大だつ走事件でカメ吉だけになった。日当たりのいいその池は、人がよく通つてにぎやかで、いつもカメ吉は楽しそうでかわいかった。四年生までは、いつも遠くから見ただけだった。だから、五年生で飼育委員になり、初めてさわった時は、思ったより大きくてどきどきした。意外とざらつとしていたので驚いた。見た目では、もっと重たいと想像していたけれど、大ききの割にひよいと持ち上げられた。全長二五センチ、幅二十センチ、厚さ八センチのカメ吉は、ぼくに話しかけるように、両手の中で、ばたばたとよく暴れた。世話をする時、

ぼくはカメ吉の心の中をもう想したり話しかけたりするようになった。すると、カメ吉も一緒に笑ったり怒ったりしているように見えた。何かあるとすぐに落ち込んでしまうぼくは、何度も何度もなぐさめてもらった。

だから、六年生になった時も迷わず飼育委員会を選んだ。毎朝水そうのふたを開ける時、すのこのすき間から、頭を持ち上げて待っているカメ吉が見える。ぼくを見ると、さみしそうにしている目が丸く大きくなる。カメ吉の住んでいた亀池は、ぼくが二年生の時、ハーブガーデンになり、カメ吉は、日当たりの悪い中庭のすみっこに置かれたたたみ一じょう分の水そうに引っこした。きつとさみしかつただろうな。だからぼくは、毎朝一番に世話をすることにしている。水を抜いている間は、たわしでカメ吉のこうらを洗う。一粒ずつえさを食べるのを見届けて終わり。本当は他にも当番がいるけれど、ほとんどぼく一人。うさぎのポツキーと比

べ、なんでカメ吉はそんなに人気者になれないのか分からないけれど、一人でカメ吉の世話をしていることは平気だし、いやじゃない。むしろ、ラッキーだ。

「たまに先生もカメ吉をのぞきに来る。今日は、ちゃんと先に宿題出した？」と聞かれて、あっ！と思ひ、世話をしている手が止まる。

「まだ。」と答えると、

「宿題は、朝一番に出す！大事なこと！」

と言われる。カメ吉も大事なんだけど・・・

（あれっ、これまずいやつ。晴貴！何してんだよ！せっかくの二人の時間が少なくなるじゃないかあ。おい、ちゃんとしてくれよ。）

世話ができなくなつた朝は、代わりに昼休みに行くけれど、やっぱり自分のすることはちゃんと終わらせないと。周りの人に迷惑もかけるし、何よりカメ吉にさみしい思いをさせる。そのことにカメ吉のおかげで気付いた。

次の朝、水そうのすのこを取つた時、カメ吉はすぐに気付いて、ゆつくりこつちを見た。

「ごめん、朝に出せるように、前日にちゃんとすませて、朝もさつさと出すよ。」

（そうだよ頼むぜ、晴貴！）

そろそろぼくは卒業。カメ吉といられる時間も少なくなつてきた。今、世話をぼくばかりしているから少し心配で、飼育委員のみんながしてくれたら安心なので、できれば委員会ですの事を話したい。カメ吉のかわいさも。

カメ吉が岩に時々乗っていることがあるけれど、その時は日光浴をしたい時だから、日光に当てさせてあげると、とても喜ぶ。他にも水でこうらをきれいにしている時、カメ吉が鼻からボコボコと泡みたいなのを出す。それは、鼻から呼吸しているからで、顔に水が当たりたくないから、こうらにこもるけれど、大丈夫だと思つて顔を出したら、また水が当たつて引っこむ。その出てきたりひっこんだりしている顔も最高にかわいい。（ちよつとやめてよ！

鼻に水が入るじゃないか。そろそろいけるか？いやまた晴貴がかけてくる。やばい！）と言っているようだ。いつもはカメ用のえさを食べるけれど、他の物も食べる。みんな驚くと思うけれど、たんぽぽの葉はよく食べる。（あれ！えさがいつもと違う。確かにあればつかじゃあきるんだよなあ。晴貴ナイスッ！）とたぶん喜んでゐる。みんな！こんなかわいいカメ吉をよろしく頼む。

カメ吉！ぼくが卒業しても元気にしててな。卒業式の朝はお別れを言いに行く。カメ吉も最後は少し涙目になるかもな。でも中学生になるともつと相談することが増えるよ。今までありがとう。これからも話しようぜ！